

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

教授 坂本 宏史

1. 教育の責任

健康科学部のリハビリテーション学科の教員として、総合基礎科目・専門基礎科目を担当している。過去2年間の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は、本人の研究領域である解剖学（講義・実習・演習）で、リハビリテーション学科の専門基礎科目を構成する。

2021 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	前期	必修	130 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	130 名
地域連携の理論と実際	後期	選択	57 名
解剖学Ⅰ	前期	必修	77 名
解剖学Ⅱ	後期	必修	77 名
解剖学実習	前期	必修	77 名
解剖学演習	後期	選択	32 名
化学基礎（再履修者対象）	集中	必修	3 名
臨床社会学スタディーズ	後期	必修	46 名

2022 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	前期	必修	128 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	128 名
地域連携の理論と実際	後期	選択	7 名
解剖学Ⅰ	前期	必修	99 名
解剖学Ⅱ	後期	必修	99 名
解剖学実習	前期	必修	99 名
解剖学演習	後期	選択	38 名
人体構造機能学Ⅱ	後期	必修	62 名
化学基礎（再履修者対象）	集中	必修	3 名
卒業研究	通年	選択	4 名
臨床社会学スタディーズ	後期	必修	29 名

2023 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	前期	必修	122 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	122 名

地域連携の理論と実際	後期	選択	39 名
解剖学Ⅰ	前期	必修	102 名
解剖学Ⅱ	後期	必修	98 名
解剖学実習	前期	必修	101 名
解剖学演習	後期	選択	35 名
人体構造機能学Ⅱ	後期	必修	62 名
化学基礎（再履修者対象）	集中	必修	3 名
ジェンダースタディーズ	後期	必修	35 名

2024 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	前期	必修	105 名
基礎演習Ⅱ	後期	必修	108 名
地域連携の理論と実際	後期	選択	51 名
解剖学Ⅰ	前期	必修	77 名
解剖学Ⅱ	後期	必修	77 名
解剖学実習	前期	必修	75 名
解剖学演習	後期	選択	29 名
人体構造機能学Ⅱ	後期	必修	63 名
化学基礎（再履修者対象）	集中	必修	5 名
卒業研究	通年	選択	2 名
ジェンダースタディーズ	後期	必修	25 名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

学内委員会

- 1) 図書館運営・紀要編集委員会
- 2) 教務委員会
- 3) 研究・動物実験委員会
- 4) 入試問題作成小委員会

学外委員会

大学健康科学部の拠点である富士河口湖町および富士河口湖町観光連盟からの依頼に応じ、一大学関係者としての立場から委員会活動に参加している。

- 5) 富士河口湖町地域福祉活動計画進捗状況評価委員
- 6) 富士河口湖町地方創生総合戦略策定検討委員
- 7) (富士河口湖町観光連盟)高齢者と障がい者に優しい観光まちづくり推進委員

2. 教育の理念・目的

本学は、「様々な総合的問題に立ち向かうことができる問題解決力を備えた人材」を養成するため、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つの教育目標を掲げている。

学生が今後遭遇する様々な問題に対して、適切な対応ができるよう、問題への向き合い方、情報収集の仕方、収集した情報の使い方を、「解剖学」の教育を中心に伝えたいと考えている。「解剖学」は、リハビリテーション学科の専門基礎科目であり、上述の「様々な総合的問題に立ち向かうことができる問題解決力」のために必要な、まさに基礎知識である。同時に、基礎知識を身につけることで、人体構造の妙について、さらにいろいろな障がいについて、理解できる体験を通して、学ぶことの楽しさ・深さに興味を持ってもらいたい。

3. 教育の方法

- ・ 標本（模型・実物）や三次元画像教材を利用して、人体の構造（器官系や組織）を体験的に理解することを目指す： リハビリテーションでは、患者に起きている障がいの発生メカニズムを理解していることが前提である。リハビリテーションの専門家を目指す学生にとって、その基礎として、人体の構造を十分に把握できるよう、実際に標本に手を触れ、様々な方向から観察し、立体的に理解する機会を多く取り入れている（実践型学習）。さらに、後述する授業時間内の小テスト・課題において、標本を注意深く観察することで解答を導くことができるよう工夫している。解剖学の講義、実習が一通り終わった1年次の最後に、実物の人体標本を観察するための学外実習を設け、知識の復習・確認の機会としている。
- ・ 解剖学の講義（座学）と解剖学実習の進度を揃え、人体の構造・機能を多角的に理解することを目指す： 講義では、教科書や三次元画像教材を利用して、専門用語の解説が中心となる。実習と進度を揃えることにより、理解しにくい構造や概念を学生自らじっくりと調べる機会が生まれる（問題解決型学習）。
- ・ 授業内で小テストや課題を課し、授業で学んだ知識の整理を促す： 毎回あるいは単元ごと、時間をおかず授業で学んだ内容について整理することで学習効果と学生の知的満足度を高められると考え実践している。小テストや課題にはオンライン（Microsoft Teams）を活用し、学生へのフィードバックの効率化を図っている。

4. 教育の成果・評価

FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートを活用して、授業内容の反省点を振り返り、改善に活かすことができる。また、実際の授業内容についても、項目毎に分析を行い、コメントの内容とともに、次年度のシラバスや授業内容に活かしている。

- ・ 解剖学Ⅰ・Ⅱ： 学生による授業評価結果において、同時期に開講される解剖学実習との繋がりについて肯定的なコメントが見られ、期待した効果が現れていると考えられる。
- ・ 解剖学実習： 学生自ら意欲的に学習しやすいように、アクティブラーニングを取り入れた。また、上級生によるチューター制度（スチューデント・ジョブ）も活用し、アクティブラーニング時の学生サポートの充実を図った。学生による授業評価結果においてもチューターの評判は予想以上に高く、今後も積極的に導入したい。
- ・ 基礎演習Ⅰ・Ⅱ： 健康科学部1年次生全員がコース・学科を超え、さらに少人数グループを結成し、同じ内容を演習するという趣旨で進められている。複数の教員で担当したが、学生による授業評価結果において概ね高評価が得られた。本科目の主な学修内容であるグループワーク、レポート作成、プレゼンテーションについて、満足のいく学修ができたようである。「参考文献の引用方法を詳しく教えて欲しい」等の学習意欲の高い学生からの要望にこたえられるよう改善をしていきたい。

5. 今後の目標

リハビリテーション学科の学生は、学年が進むにつれ、リハビリテーション医療の実践的知識すなわち、症状の分析や適切な検査の選択、診断の立て方など臨床的な視点から情報を評価し、問題解決する能力が求められる。それに伴い、学生は臨床に必要な医療スキルを学ぶことになる。

筆者の専門である解剖学教育では、以下のような目標を掲げたい。

短期目標：

- 1) 学ぶことの楽しさ・大切さを伝える。
- 2) 学年が進むにつれ増える専門教育に必要な最低限の知識を身につけてもらう。

長期目標：

将来の医療実践において高品質な医療を提供し、患者の健康と福祉を守るために必要な能力を備えた医療専門家を育成する。

そのためには、

- ・ 人体の構造と機能についての理解や興味を深める。

- ・ 人を対象とする解剖学を学ぶことで、倫理的な問題や法的な制約に関する理解を深め、患者の権利と安全を尊重した医療提供ができるよう学生に教育する。
- ・ 絶えず進化する医療情報に対し、信頼性のある情報を選択し、最新のエビデンスに基づいた医療判断を行う能力を養う。
- ・ チーム医療の重要性を認識し、他の医療専門家や患者との効果的なコミュニケーションスキルを磨く。
- ・ 医学の知識は絶えず進化しているため、学生には卒業後も自己学習を続け、専門的成長を目指す姿勢を養う。